広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	第11回国際言語学者会議に出席して
Author(s)	橋内, 武
Citation	ニダバ , 2 : 83 - 92
Issue Date	1973-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044695
Right	
Relation	

第１１回国際言語学者会議に出席して

橋内　武

0. はじめに
1. ボローニァに着いて
2. 日　程
3. 全体会議と分科会
4. レセプションとエクスカーション
5. フィレンツェでの閉会式
6. 社会言語学の最近の動向

0　はじめに

１９７２年夏、８月から９月にかけてヨーロッパで開かれた２つの国際会議 ── The Third International Congress of Applied Linguistics：第３回国際応用言語学会議（８月２１日～２６日、デンマークのコペンハーゲン）と The Eleventh International Congress of Linguists：第１１回国際言語学者会議（８月２８日～９月２日、イタリアのボローニァ）に出席した。筆者は、２つの国際会議を間にはさんで丸２カ月間欧州７カ国を旅し、９月１２日に帰国した。そして４日後の９月１６日には松江に向った。島根大学文理学部で開かれた西日本言語研究会第２回大会に出席するためである。本稿は、そこでの拙い講演「２つの国際会議に出席して」を元に書き下したものである。

筆者は既に「国際応用言語学会議から ── 社会言語学を中心に」（『紀要』第８号、ノートルダム清心女子大学、岡山、１９７３）という一文を草しているので、本稿では焦点をボローニァ国際言語学者会議に絞ることにする。

1　ボローニァに着いて

８月２７日（日）。昨夕コペンハーゲンを発ち、夜行列車で南下する。列車は小１時間遅れて午前１０時半ボローニァに着く。手荷物をひとまず駅に頂け、地図を頼りに市内を巡る。

ボローニァは、中世以来の大学町。斜塔の天辺から市街を見下すと、赤レンガの屋根が敷物を詰めたように拡っている。寺院も多い。建築物は何れも立派である。内部には大概数世紀前の彫刻や絵画

が並んでいる。古色蒼然たる街角を歩いていると、軍人、共産党員、修道女、物乞い等にぶつかる。イタリアらしい光景である。昼食は路地奥のピッツェリアでとる。お客は皆至極のんびりとくつろいでいる。

駅前の案内所で宿を確かめ、重い荷物を背負って宿舎に向かう。宿舎の鍵番には英語が通じず、ひと苦労する。しかし、何とか意が通じる。鍵をもらって、部屋に入り旅装を解く。

夜行で来て眠気を催すが、まだ一仕事残っている。会場のボローニャ大学に行って、登録手続きをしなければならない。大学といっても別に塀で巡られているわけではなく、外見上他の建物と判別し難い。中に入る。受付嬢は、早口のイタリア語で「大会参加費は、○○リラです」というが、その○○がつかめず、大きい紙幣を出し、釣銭をもらう。それからプログラムや発表要旨のブリプリンツ一式を受け取る。ブリプリンツは大判1,300ページに近い紙の束で、ペーパーナイフを使わなければ読めないという代物である。

宿舎に戻って夕食をとり、プログラムに目を通し、ベットに入る。夜8時半からのレセプション（ボローニャ大学主催）には欠席した。飲むよりも話すよりも先ず眠りたい、というのがボローニャ第一夜の欲求であった。

2　日　　程

翌28日から始まった国際会議の日程は、次のとおりである。

8月28日（月）

午前の部：開会式

全体会議「言語普遍性」

午後の部：分科会

A、言語学史

B、タグミミクス

C、成層文法

8月29日（火）

午前の部：分科会

A、史的言語学Ⅰ

B、意味論Ⅰ

C、言語類型論Ⅰ

D、心理言語学Ⅰ

E、生成文法Ⅰ

F、社会言語学Ⅰ

G、雑Ⅰ

H、言語的範疇

I、言語と意味Ⅰ

J、言語分析の諸相Ⅰ

全体会議「生成音韻論」

午後の部：分科会

A、人類言語学

B、統語理論Ⅰ

C、共時統語論

夜：ボローニャ市主催のレセプション

8月30日（水）

丸一日：ラヴェンナへエクスカーション

8月31日（木）

午前の部：分科会

A、文構造

B、意味論Ⅱ

C、言語類型論Ⅱ

D、生成文法Ⅱ

E、心理言語学Ⅱ

F、史的言語学Ⅱ

G、社会言語学Ⅱ

H、雑Ⅱ

I、言語と意味Ⅱ

J、言語分析の諸相Ⅱ

全体会議「意味特徴」

午後の部：分科会

A、統語理論Ⅱ

B、形態構造と機能

C、深層構造とは何か

9月1日（金）

午前の部：分科会

A、史的言語学Ⅲ

B、意味論Ⅲ

C、言語類型論Ⅲ

D、心理言語学Ⅲ

E、生成文法Ⅲ

F、社会言語学Ⅲ

G、雑Ⅲ

H、音韻理論

I、言理学

J、言語分析の諸相Ⅲ

全体会議「社会言語学と言語変化」

午後の部：分科会

A、自律的音韻論対体系的音韻論

B、規則の順序付け

C、語と文化の再構

9月2日（土）　フィレンツェにて

午前の部：全体会議（閉会式）

昼：昼食会

3　全体会議と分科会

大会は6日間にわたって行なわれたが、実質的には（月）（火）（木）（金）の4日間であって、参加者は毎日宿舎と会場（2個所）の間を往復した。分科会（研究発表会）の会場にはボローニァ大学の教室があてがわれたが、全体会議（講演会）は大学から歩いて15分くらいかかる所にある大ホールで行われたので、暑い最中会場から会場へ移るのは楽なことではなかった。大ホールは、広い割には天井が低く、音響効果が悪のにはあきれた。とにかく、せっかくの講演が余程良い席に着かなければ、満足に聴けないという状態であった。

全体会議の方が設備の貧弱さから聴衆を不愉快にさせたとするならば、分科会の方は運営の不行き届きから参加者の気分をそこねたと言えよう。当日会場に行ってみると急にプログラムが変更になったことを知らされる。聴きたいと思う発表者が現れていないとか、発表者の都合で順序が入れ替った

ため楽しみにしていた研究発表が既に済んでいる、といった具合である。さらに悪いことには、いくつかの教室で行われている研究発表が予定通りに進行しないため、発表最中に出たり入ったりする者が続出し、それが発表や討論の進行を妨げたことは言うまでもない。

会議は毎日午前9時から始まり、12時半に午前の部が終る。それから3時間半にわたる長い昼休みがあって、午後4時に再開、午後の部となる。そして午後7時まで研究発表が続く。長い昼休みと遅い夕食というイタリアの習慣に合わせられず、昼下がりの街角をぶらついたり、午後の発表の合間に会場を抜け出て、ピザに手を出したりした。街には言語学者があふれ、あちこちで非公式の言語学談話会が開かれた。

この国際会議の公式言語は、英仏露の3カ国語であるが、伊独西も討論等の場で許された。研究発表221（欠席者、補欠論文を含む）のうち、英語を用いたものは153を数え、全体の7割近くを占めた。参加者の数ははっきりつかめない。正会員だけで1,000人を優に越すと思う。それに幽霊会員や同伴者を加えたら2千数百に及ぼう。日本からは服部四郎博士（CIPLの一員）以下20数名が参加した。日本人の発表者は、服部四郎、池上嘉彦、高田誠、四倉さよの4氏であった。

全体会議の主題と講師は、次のとおりであった。

第1日　Language Universals：J. Greenberg, E. Coseriu, H. J. Seiler の3人

第2日　Generative Phonology：M. Halle と G. C. Lepschy の2人

第4日　Semantic Features：L. Pierto と P. Kiparski の2人

第5日　Sociolinguistics and Linguistic Change：T. De Mauro, W. Labov, M. A. K. Halliday の3人

全体会議については、国広哲弥氏が既に報告している（「ボローニャ国際言語学者会議に出席して」『言語』1月号、1973）ので、筆者が何よりも関心を注いだ第5日についてのみ補足することにしよう。De Mauro の講演 Sociolinguistique et changement linguistique : quelque considérations schématiques からはこれといった独創性は窺えなかったが、様々の学説や基礎概念を再吟味し、整理し直した点は、議論の混乱を正す上で意義があったと思う。次に立ったHallidayは、構造と機能の両面から言語を見ていくべきことを強調した上で、自説とBernstein理論とのつながりを被露した。

最後にLabovが講壇に上った。演題はThe use of Present to Explain the Pastである。社会言語学的調査と実験音声学のデータをもとに、英語音韻史を説明しようという試みであった。調査、統計、実験、文献、と王手搦手から攻めるLabov一流の戦略に筆者は降参した。なお、ここで述べたHallidayとLabovの最近の方法論を詳しく知るには、次の書物が便利であ

ろう。Halliday, M. Explorations in the Functions of Language. London, 1972。

Labov, W. Sociolinguistic Patterns. Philadelphia 1972.

分科会（研究発表）は、社会言語学・人類言語学関係を中心に聴いた。数多い発表論文のひとつひとつを紹介するスペースはない。ひとこと印象を述べるなら、実に多種多様な立場と分野からの発表があったことである。生成文法以外の言語理論も負けてはいない。火花を散らすような討論風景に幾度か出合い、言語学（のみならずあらゆる学問）は、特定学派の専有物ではない、とつくづく思った。史的言語学が若返り、心理言語学や社会言語学が盛んになってきた。社会言語学の研究動向については、あとで述べよう。

4　レセプションとエクスカーション

第2日（8月29日）の夜、ボローニァ市招待のレセプションに出る。パラッツォ・ダクルシオの3階が会場である。壁には数々の名画が並んでいる。そういう豪華な大広間が続いて、そこへ参加者は夫人や子供を連れて入っていく。しかし、客の数は多すぎ、会場は狭すぎた。ラッシュ時の国電に乗ったようで身動きがとれない。飲みものも食べものも早いもの勝ち。あとから来た者にはない。先着順であっという間に消えてしまった。こんな所に長くはいれぬ、と早々に引き上げた。

第3日（8月30日）は、丸一日エクスカーションに当てられた。きょうは国際会議も中日を迎えラヴェンナへバス旅行である。天気はあいにく小雨模様。バスの列が東進する。家族を交えて優に2千人を越そうという一団が、モザイク壁画の町に繰り込んだ。同乗してきた旅行社のガイド嬢に案内してもらい、ギリシャ正教の寺院（複数）に入る。内部は暗いけれど、天井にも壁面にもキリストや聖人や天使や羊が描かれていて、それらが金色に輝いているようである。筆者にはその有難さは分らぬが、誰とかの墓にも詣でた。

アドリア海岸のパークホテルに着くと昼食だった。多くの日本人学者（筆者を含む）はどうも社交下手で、食べ物をもらってくると口をモグモグさせるだけである。見知らぬ人とすぐ歓談したり、音楽に合せて踊り回ったりするという気軽な振舞はなかなかできぬらしい。食後は時間をつぶすのに困った。樽から供せられる甘口のぶどう酒を飲んだり、ホテルの近くにある木立や砂浜を歩いたりして異国に来たことを噛み締めた。

団体旅行の嫌いな筆者には、全体会議や分科会をせずに、なぜ丸一日エクスカーションに費さなければならないのかわからなかった。それにどうも旅行社が前面に出過ぎたようで、気に食わなかった。最終日のフィレンツェ行きにしても同じような感想をいだいた。

5　フィレンツェでの閉会式

最終日（9月2日）には、朝早く特別仕立ての列車でフィレンツェに行き、パラッツォ・ヴェッキョで全体会議（閉会式）をした。市のお偉方やイタリア言語学界の長老が式辞を述べた。その後休みもなしにえんえん1時間余りにわたってイタリア諸大学の言語学講座の歴史と現状について聴かされた。これには皆うんざりし、中途退出する者が続出した。最後に、Einar Haugen に代って選ばれた次期会長のWilliam Moulton が、英仏伊の3カ国語で挨拶した。

閉会式終了後、場所を変えて昼食会が開かれたが、会場は広いようで狭い。2千人もの人が食べ物に競ってたかる図には閉口した。そこで、五月雨解散に相成った。

特別仕立ての列車に乗ると、ボローニャ着は最夜中になるというので、早々別の列車でフィレンツェを発った。座席に足を伸ばしながら、なぜわざわざ閉会式だけのためにフィレンツェへ行かなければならなかったのだろうか、と考えた。 ── そして、これで国際会議というお祭りが終ったのだと思った。

国際会議開催地ボローニャとフィレンツェの建築美には脱帽したが、イタリア式会議術にはお世辞すら出なかった。

6　社会言語学の最近の動向

以上、国際言語学者会議の印象記を綴った。どうも悪評を並べたてた感があるが、これはその運営方法に対してであり、講演内容や発表論文そのものに対してではない。

イタリアはボローニャとフィレンツェにまで身銭を切って行った甲斐は、確かにあった。それは、(1)書物を通してしか知らなかった著名な言語学者のケイガイに接し得たことであり、(2)欧米の若い研究者のあの熱烈なる学究心に触れたことであり、(3)筆者の志す分野（社会言語学ないしは人類言語学）の研究が、各国で急速に進んできていることを知ったことであった。

(2)については、高田誠氏が「ボローニャにて」（『言語生活』12月号、1972）の中で触れているから、その記事を読んでいただきたい。筆者も高田氏と同じように、若い研究者が学会、国際会議に出ることの意義を痛切に感じた次第である。その点機会に恵まれている欧米の院生、助手、講師クラスの人々は羨しい、と思った。

(3)については、ここ数年の間に出た、A専門誌、B論文集、C概論書を挙げてみれば明らかであろう。（ここでは、英文のものに限る。）

A、以前からあった Sociolinguistics Newsletter のほかに、Language in Society（社会言語学の本格的専門誌）が72年に登場した。この雑誌は、Dell Hymes が編集し、年2回ケンブリッジ大学出版会から出る。

B、ここ一両年の間に、J. Fishman(ed), Advances in the Sociology of Language 2 vols (The Hague, 1971 and 1973).
J. Gumperz and D. Hymes (eds.), Directions in Sociolinguistics (New York, 1972).
S. Ghosh (ed.), Man, Language and Society (The Hague, 1972).
等の論文集が現れた。ペンギン双書にLanguage and Social Contextや Sociolinguisticsが加わった。スタンフォード大学刊のLanguage Science and National Development Seriesは、各巻それぞれ個人論文集(Ferguson, Greenberg, Gumperz, Haugen, Lambert 等)の形をとっている。

C、概論書 R. Burling, Man's Many Voices: Language in its Cultural Context (New York, 1970) J. Fishman, Sociolinguistics: A Brief Introduction (Rowley, 1971)は、共にテキストとして手頃だろう。

注目すべきは、おびただしい数の出版物だけではない。最近目立ってきたのは、言語学や社会学や人類学の国際会議に必ずといっていいほど「言語と社会」「言語と文化」とか「社会言語学」「人類言語学」という名の分科会が設けられるようになったことである。ボローニャ国際言語学者会議よりひとあし先に開かれたコペンハーゲン国際応用言語学会議では、この分野の発表が40近くに及び、3分冊の大会紀要の1冊を埋めることになったという。73年夏シカゴで開かれる第9回人類学民族学国際会議には「言語と思考」というテーマの分科会が用意されているし、74年のトロント社会学世界会議にも社会言語学の分科会がいくつか企画に上っていると聞く。

73年夏には前記のシカゴ会議とは別に、モスクワで国際社会言語学会議が開催されるし、恒例のアメリカ言語学会言語学講座(会場:ミシガン大学)は、「時間と空間と社会における言語」というテーマのもとに開かれるという。このように見てくると、今年は国際社会言語学年とでも称すべき年になりそうである。

(1)著名な言語学者、(2)欧米の若い研究者、(3)社会言語学の急速な発展、と3つ別々に並べたけれども、それらはいずれもは筆者に「言語学の国際性」を認識させた点では同じであった。あれから既に5カ月。帰国の途、これも読まなければ、あれも知らなければ、と思ったことを、これから一つずつ手を付けていこうと思っている。(完) ≪1972年2月3日 ノートルダム清心女子大学≫

追記 本文脱稿後、日本言語学会から『言語研究』第62号が送られてきた。これには、野上素一氏の「第11回国際言語学者会議に出席して」と菅田茂昭氏の「第11回国際言語学者会議の論点」が載っている。本文に引いた国広哲弥、高田誠の両氏の報告記と合せて読まれるようにおすすめする。

1973年3月1日

[Summary]

The Eleventh International Congress
of Linguists (Bologna, 1972)

Takeshi HASHIUCHI

The Eleventh International Congress of Linguists was held at Bologna and Florence, Italy from August 28th to September 2nd, 1972. This report on the Congress is divided into five sections:

1. Introduction to Bologna
2. Schedule of the Congress
3. Plenary Sessions and Sectional (or Group) Meetings
4. Reception and Excursion
5. Final Session at Florence
6. New Developments in Sociolinguistics

The reporter found the organization of the Congress very poor. The acoustic condition of the hall for the Plenary Sessions was so bad that the audience could hardly understand the speaker. Sudden changes of the program for the Sectional (or Group) Meetings annoyed the participants, also. The reception on Tuesday evening was overcrowded. The excursion to Ravenna on the following day was not exciting not only because of bad weather but also because of mass group gathering. And the Final Session at Florence was boring and worthless.

However, the reporter was delighted to be abroad meeting both established and young scholars at the Congress.
He realizes that the scope of linguistics is getting very much wider than ever before. It is worth recording the fact that transformational-generative grammar is not the only linguistic theory available today but that there exist several other alternatives which are competing with one another.

A number of Sectional Meetings consisted of interdisciplinary linguistics. Such field as psycholinguistics and sociolinguistics are gaining new but essential positions in the study of language. Linguistics is no longer a narrow subject: it is rather a crossroad of sciences and humanities. Finally, the reporter adds some information on sociolinguistic reasearch today: journals, monographs, texts and academic meetings.

Lecturer in English and Linguistics
Notre Dame Seishin University
Okayama, Japan